

第2章 ほやほやキャプテン

谷口がキャプテンになって数週間がすぎた。月ばかり四月。新学期である。今日は新入部員がはいってくる…

2・1 新キャプテンの朝

谷口「はあ、ふう、はあ……」

父「タカ、朝っぱらからそんななりでなにやってんだ？」

谷口「トレーニングだよ。」

父「キャプテンともなると、いうことがちがうぜ。」

谷口「だって立場じゃ努力しなくちゃ。」

母「タカオ、いったいどこほつき歩いてたんだい、はやくごはんたべちゃいな！」

谷口「うん！ いただきます。」

母「ほらほら、とうちゃんものんびりしていいのかい。」

父「おう。」

谷口「いってきまーす！」

父「あのやろう、かばんをわすれていきやがった。」

ガラガラと音をたてて玄関があき、谷口がもどってきた。

谷口「いけね、かばん、かばん！」

母「いいのかいあんなんで……」

父「……」

あきれた顔で食事をつづけるがもう一度谷口はもどってくる。

谷口「いけね、ぼうしわすれた。」

母「……しかしよくまああれでキャプテンがつとまるねえ……」

父「……」

2・2 学校で

丸井「あ、キャプテンだ。」

丸井は登校途中の谷口を見つけた。

丸井「キャプテン！ キャプテン！ 谷口キャプテンてばっ！」

谷口は名前をよばれてはじめて自分がよばれていたんだときがつく。

谷口「シート、シート！」

丸井「どうしたんす、キャプテン……？」

谷口「あまり、キャプテン、キャプテンといわないでくれ、はずかしいじゃないか……」

丸井「キャプテン！ はずかしいとはなんスか、はずかしいとは！ あなたはキャプテンでしょっ！」

丸井の声がだんだんとおおきくなって、そのようすをみていた生徒たちが笑っている。

丸井「ちょ、ちょっと。もっとキャプテンとしての自覚をもってくださいよ……きょうからは新入部員がはいってくるというのに、もう……いいですか新入部員にせつする態度は最初がかんじなんス、最初が。」

谷口「はっ、はいっ。」

丸井「はいはないでしよ、はいは、キャプテンらしくわかったとか、そうかとか、もっといいようがあるでしようが！」

谷口「はいっ……いけね……」

丸井「ま……いいス、それから新入部員へのあいさつへのことば考えておいてください、じゃあ。」

谷口「あいさつのことばか……」

2・3 授業中

今は国語の授業中である。谷口は朝、丸井の言った新入部員へのあいさつのことばを一生懸命考えている。先生は授業がうわのそらの谷口をみつける……

生徒「春はあけぼのようよう白くなりゆく、山ぎは少しあかりて……」

教師「よろしい、そこまで、つぎ谷口！」

男子生徒「おい谷口……」

女子生徒「谷口さん……」

まわりの生徒にいわれてやとで気がつく、すばやく立ちあがったが……

谷口「はっ、はいっ。み、みなさんこんにちは！ キャプテンの谷口です！」

生徒「ぷーっ！」

生徒「わっ、はっはっはっ……」

教師「……」

クラスのみんなに笑われてしまった、先生にはおこれ廊下で頭を冷やしてくるように言われてしまった。

2・4 新入部員へのあいさつ

そんなこともあったが、放課後となりました。谷口は部室の中で着がえをしています。さあ谷口キャプテンの新入部員へのあいさつは……

丸井「キャプテン、はやくしてください新入部員も全員そろってます。」

谷口「えっ。」

丸井「かわいいものですね。」

谷口「ああ……」

丸井「ささ、はやく。」

谷口「う、うむ。」

丸井「ぼくにも後輩ができるんだなあ、はやいですねえ一年たつのなんて」

窓からみえる新入部員たちの姿に緊張がたかまる谷口であった。

ユニフォームに着がえる谷口であったが手と足が自分のいうことをきかず、おもうように着ることができない。

そんなこんなでさあ谷口キャプテンのあいさつがはじまります。

丸井「では、キャプテンからあいさつをひとこと。」
 谷口「み、みなさんこんにちは……。えーっば、ぼくがキャ…キャキャブ、えーキャブ……。あれ…キャブ、キャ、キャ、キャブ……。……」
 小山「お、おいつ。」
 丸井「ありがとうございます。キャプテンにひきつづきまして副キャプテンのあいさつ、どうぞ!」

谷口はあいさつの途中でだまってしまった。丸井の機転で副キャプテンのあいさつに変わった。

小山「う、うむ。副キャプテンの小山だ、きょうはこんなにおおくの新人部員をむかえることができてひじょうにうれしくおもう……」

小山「キャプテン!、新入部員のきょうの日程はどうなってますか?」

谷口「え、あー、じゃあきょうのところは練習の見学でも……」

丸井「キャプテン、最初がかんじんなんス、最初が、あまやかしちやダメですよ!」

谷口「じゃあ、どうすれば……」

丸井「あるでしょ、草むしりでも、道具のていれでも!」

谷口「じゃあすみません、草むしりでもしてください。」

丸井「すみ…、もつとキャプテンらしく命令調で!」

谷口「う、うむ、や、やれっ!」

丸井「このーっ、モタモタしてやがるとぶつとばすぞっ!」

一年生「は、はい。」

丸井「キャプテンがおとなしくいつてるからってなめるんじゃないえっ。」

一年生A「あれで、キャプテンだつてさ。」

一年生B「かんろくねえなあ。」

丸井「まあ、キャプテンのプレイをみればなっとくするだろう。」

たよりないキャプテンという印象をもたれてしまったようですが、ようやく一年生が草むしりをはじめました。その中で一人だけネットに背をもたれて草むしりをしていない一年生がいます。

丸井「おい、そのサルみたいの!」

イガラシ「サルってだれのことなの?」

丸井「しっけい、しっけい、なまえがわからなかったから……」

イガラシ「で…なんですか?」

丸井「草むしりをしてほしいんだけど……」

イガラシ「草むしりをしたからって、野球がうまくなるわけじゃあるまいし。」

丸井「て、て、て、てめえ、いまなんていった!」

イガラシ「いえ、こっちの話。」

丸井「このう、一年生のくせに……」

グラウンドでは上級生の練習がはじまろうとしています。

谷口がノック役での守備練習がはじまろうとしているのですが……

谷口「いくぞショート!」

高木「おう!」

谷口のバットが空を切った。ボールがなかなかバットに当たらない。

一年生A「ちよっちよっちよっ……みろよあれ……」

一年生B「ん……?」

イガラシ「なんだこの野球部、じょうだんじゃないぜ!」

谷口は丸井にノック役をかわってもらいベンチに腰かけた。うつむきながら自分がキャプテンとしてほんとうにふさわしいのか疑問に感じていた。

谷口「キャプテン…か、まるであべこべじゃないか、みんなにめいわくばかりかけちゃって……」

考えこむ谷口だったが、前キャプテンにいわれた言葉を思いだしていた。

「あんなにへただったおまえが、かげの努力で期待にこたえてくれたじゃないか、こんどはキャプテンとしての期待にこたえてくれんか、おまえならできる！ みんなをたのんだぞ！」そんなことを思いだした谷口だったが自分がなにをしたらいいのかわからないでいた。

2・5 ノック練習

谷口は今日のできごとをぼんやりテレビを見ながらまた思いだしていた。みんなにめいわくをかけたこと、ノックができなかったこと……

父親はテレビに夢中になっている。

なにをおもったのか野球道具をもって一人神社に向かった。そして神社につくときよう失敗したノックを練習しはじめた。だがなかなかタマがあたらない。けれども何回となく挑戦しているとボールがバットにかするようになってきた。

谷口「あ、あたった！ フライになるということはバットをふるタイミングがはやいんだな。」

息をきらしながらも谷口のノック練習はつづく…

谷口「はあ、ふう、だいぶあたるようになったぞ、でもノックはおもったところに打てなくちゃ。」

谷口「はあ、ふう、はあ、まだまだ。」

谷口「がんばらなくっちゃ！」

父親が心配になって見にきたが練習していることがわかると声をかけずにじっと見つめていた…。

2・6 練習風景

谷口が守備練習をしている。そこには新入部員のあいさつに失敗した谷口の姿はなかった。のびのび、自信まんまんてボールをおいとして投げる谷口の姿があった。

一年生A「み、みろよ、あれキャプテンじゃないか？」

一年生B「えっ？」

一年生C「やるーっ、さすがキャプテン。」

一年生B「うまいなーっ。」

一年生A「おれキャプテンでいつもベンチにすわっているもんだとおもってたよ。」

一年生B「ばくもさ。」

丸井「なんだ、なんだ、おめえらキャプテンをそういうふうにみていたのかっ！」

一年生C「だ、だってこないだのノックひどかったじゃないですか。」

一年生B「なあ…」

丸井「……」